
自然がお怒りになる頃にシリーズ第一弾、たいふうのなく頃に罪

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自然がお怒りになる頃にシリーズ第一弾、たいふうのなく頃に罪

【Nコード】

N3235M

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

たいふうのなく頃にの解答編が、遂に登場した。さて、和解の戦いはどうなるのか？

タイフウノナクの章 第一話 打ち破るとき

この戦いの欠片に、新たな思惑が作られる。

ゲームオーバーは、却下された。

1989年の世界の前に紀元前900年に、九代目台風の狂気に、今の台風の狂気が継承式を始めていた。

「貴方に、この台風の狂気の称号を与えます。」

「ありがとうございます。台風の狂気様！これより吾が十代目台風の狂気だ！」

十代目台風の狂気は、さらに自然の主を引き継いだ。

台風の狂気は、八代目台風の狂気が6500万年前に宇宙の知識を得て、隕石を呼び寄せて恐竜を絶滅させた時、ダイナソー・ブラッドを酒割りにして、自然の主になら飲めないレア酒にした。

そして、1989年5月28日。

台風の狂気は、家具を呼び寄せた。

暖気流、寒気団、メソ擾乱だ。

自然の主の秘書、寒冷低気圧もやってきた。

「自然の力を人間に浴びせてやる。自然は魔法を上回るパワーを持

っ！」

強風となって彼ら4人は消えた。

たいふうのなく頃に罪

たいふうのなく頃に罪

1989年6月23日の東京。

深澤と現崎は、気象庁の極秘プロジェクトに参加した。

他の13名も来ており、全員気象に関するとても詳しい。

極秘プロジェクトの主、麻素深がある人物を呼び出した。

「古宮琉璃華、彼女は、自然教の信仰者で気象学者である。」

作戦を会議している間に、麻素深は、気象庁を出た。

麻素深が気象庁から出た後、台風の狂気にあってしまった。

「お前は誰だ！」

「台風の狂気だ。貴様を此处で殺す！」

台風の狂気は、右腕から剣を取り出した。

麻素深は、近くにある鉈で対抗したが、台風の狂気が圧倒的であった。

「麻素深、人間が自然を操ろうなぞ、馬鹿なことなんだよ！死ねー！」

タイフウノナクの章 第一話 打ち破るとき（後書き）

次回は、タイフウノナクの章第二話古宮琉璃華。お楽しみに。

タイフウノナクの章 第二話 古宮琉璃華（前書き）

台風の狂気は、麻素深を殺した後、深澤達に恐ろしい言葉を吐き捨てるところを古宮琉璃華が・・・

タイフウノナクの章 第二話 古宮琉璃華

麻素深は、逃げまくった。

「くそ、追いかけてくるなよ。」

台風の狂気は、音もなにも立てずに、麻素深に追いついた。

「何っ！いつの間に追いついたのだと！」

「麻素深、御前は、自然に愛がない。自然に愛がある者には、自然の音が聞こえる。」

台風の狂気は、剣で麻素深の心臓を貫いた。

台風の狂気は、氣象庁に一直線に進んだ。

深澤達は、台風10号をどのようにずらすかを決めていた。

その時台風の狂気が現れた。

「貴様等の行動を削るぞ。」

たいふうのなく頃に罪

たいふうのなく頃に罪

深澤は、台風の狂気を見て、反撃の言論を述べた。

「お前の行動を止める唯一の方法がある。」

「ほおー、なら全員、台風の神罰によって死ぬ運命を紡がせてやる。」

「その台風の狂気、私が止めるわ。」

古宮琉璃華が言った。

台風の狂気は、反論せずに消えた。

此処から先に待ち受けるのは、恐ろしい真実だということを深澤達は、知らないでいた。

寒冷低気圧と暖気流は、台風の嘆きの謎を解こうとしていた。

その正体は、傍観者で、奇跡を起こすとされる人物であった。

この先は、人間が第一の支配者になるとどうということになるのかというバッドエンドにつながるお話である。

台風の狂気は、あることを言った。

「人間が、第一の支配者になると、台風が作った未知のウイルスにかかり、自然鋭利症候群に感染するだろう。そうすれば我々の出番だ。ハハハハハハハ。」

寒気団も一緒にいた。

「台風の狂気様、感染に期待が震えますね。」

「ああ、そうだ。」

タイフウノナクの章 第二話 古宮琉璃華（後書き）

次回、タイフウノナクの章 第三話 真実に贖いのヒント。お楽しみに

タイフウノナクの章 第三話 真実に購いのヒント（前書き）

自然鋭利症候群の説明が、いきなり入ってきます。タイフウノナクの章は此処で終了してしまいます。

タイフウノナクの章 第三話 真実に購いのヒント

深澤達は、喜びに満ちていた。

「自然に打ち勝ったぞ！」

此の声を聞いた台風の狂気は、にやりと笑っていた。

自然幻想区域

「タイフウノナク章は、ここで終わりって感じだな。」

「甘いな深澤。これからが本番だぞ。」

「人間が第一の支配者になってめでたしめでたしというスピード完結じゃないのかよ。」

「そのところが次のゲームに悪影響及ぼすのだ。」

「何が、悪影響になるんだ？」

「教えてやる次のゲームを。」

深澤は、息をのんだ。

「自然鋭利症候群。それは、人間が自然に対して恐怖感や罪悪感を過剰に感じた時に起きる病気のこと。しかも最終的には、自殺に追い込むというほど恐ろしい症状である。」

深澤は、その病気を聞いた途端、驚いてしまった。

「まさか、次のゲームで人間全員がそうなるのかよ！」

「生き残る者もいるが、大抵は死ぬ。」

「良いぜ、台風の狂気。お前のその自然鋭利症候群に勝てるという自信があるからな。そしてお前を振り伏せる。」

台風の狂気に挑戦状叩きつけた深澤は、少し楽な気分になっていた、しかし、ここから始まる少し長めの茶番は、とんでもなく残酷なものでもある。

タイフウノナクの章 第三話 真実に購いのヒント（後書き）

次回 自然の反撃の章 第一話 2004年の世界に。お楽しみに

自然の反撃の章 第一話 2004年の世界に（前書き）

台風の狂気は、この世界で反撃を出ることを決意した。

自然の反撃の章 第一話 2004年の世界に

2004年の夏、台風がすでに3つも上陸していた。

深澤と伊達は、台風情報を欠かさずに見ていた。

自然幻想世界

深澤を新たな台風の狂気として就任させるかどうかを決める会議が行われていた。

「人間としてではなく、自然界をカルマを戻す役割になってもらわなければならない。」

寒冷低気圧が言った言葉に、現の台風の狂気は深澤に言った。

「残酷かもしれないが、これは自然と人間の奇跡の和解に向けた闘いだ。」

「俺が、十一代目台風の狂気をやるのなら、その奇跡の和解に向けた闘いを受けて立ってやるぜ！」

人間界

東賀は、西根にあることを話していた。

「私の後ろには姿なき傍観者がいるのよ。」

「それってどういうこと？」

「さあ、分からないけど・・・」

台風8号が日本に接近をしていた。

此の事は、自然幻想世界でも見れる。

西堀と円山と前木は、台風調査をしに行った。

しかしこの台風調査がのちに彼らに悲劇を与えることになるとは。

自然界の魔法を否定する軍団がいた。天界の者である。

ヴェリア・U・レネヤーリオという人物である。

「自然の臭い行動にはうんざりしてきタン。」

たいふうのなく頃に罪

たいふうのなく頃に罪

和田原は、深澤と将棋をしていた。

「もし、自然が襲ってきたらどうしようかな?」

「心配するなよ。台風8号は、それほど強くないから。」

現崎は、ある人物とであっていた。

「どうしたんだね、現崎君?」

「いや、何でもありません小此木さん。」

十代目台風の狂気は、メソ擾乱達に言った。

「お前達、十一代目台風の狂気のために、真実を一つ言つてやれ。」

「一体どういうことだ？」

「自然の真実、古宮瑠璃華の過去の罪に自分の勝っていた犬のはらわたを抉っていることである。」

「つまり、その罪どおりに本人を殺せということかよ！自然鋭利症候群になる前に殺れと言うのか？」

「古宮瑠璃華を殺さなければ、自然鋭利症候群に感染しない人達でこのゲームは破綻してしまう。それこそが史上最悪のバッドエンド
！！」

「！！・・・分かったぜよしっ、お前等古宮瑠璃華を台風8号上陸と同時にはらわたを抉るぞ！」

「了解！」

古宮瑠璃華は、自分の身に起こることをベルンカステルから聞いてはいなかった。

「ふん、見捨てやがって！」

自然の反撃の章 第二話 2004年の世界に（後書き）

次回 自然の反撃の章 第二話 古宮瑠璃華殺害と深澤裏切られる。
お楽しみに

自然の反撃の章 第二話 古宮瑠璃華殺害と深澤裏切られる（前書き）

自然の行動が暴走を始める。短めです。

自然の反撃の章 第二話 古宮瑠璃華殺害と深澤裏切られる

台風8号が上陸するまであと30分と差し迫っていた。

「いい加減誰か来ないのかしら。」

瑠璃華は、イライラしていた。

台風8号は上陸した時、深澤がやってきた。

「深澤さん、どうしてここに来たの？」

「ちょっと野暮用でな・・・」

深澤の右手から剣が出てきた。

「何をする気なの・・・」

「お前のはらわたを抉る。」

瑠璃華は、はらわたを抉られて死亡した。

深澤は変な気分に襲われていた。

台風の狂気は、何かを企んでいるように見えなかった。

「しまった罠だ。自然鋭利症候群は実際起きるが可能性を高くしてしまった。」

深澤は、裏切られたことに初めて気づいた。

自然の反撃の章 第二話 古宮瑠璃華殺害と深澤裏切られる（後書き）

次回 自然の反撃の章 第三話 深澤のミス。お楽しみに

自然の反撃の章 第三話 深澤のミス（前書き）

ミスを犯した深澤は4人の自然鋭利症候群の犠牲者を見てしまう。

自然の反撃の章 第三話 深澤のミス

「台風の狂気、貴様俺を裏切りやがったな！十一代目台風の狂気にするというのは本当のことだが、裏切るつもりでいるなら十一代目台風の狂気として一つ言う。」

「どうしたんだ？その言葉は・・・」

「お前を十代目台風の狂気の座は、たった今から十一代目である俺が引き継ぎ自然鋭利症候群を根元から取り除く！」

「それができるのなら、俺とまた決闘でもしようではないか！」

「良いぜ！俺に負けたことを後悔させてやる。」

一方人間界では・・・・・・・・・・

西根と前木と宮城と円山が、自然鋭利症候群の正体と出くわしてしまった。

「誰なの？」

一方自然界では・・・・・・・・

「くそ、なぜ俺はお前に勝てない。」

「深澤、お前と戦うのは楽しい。だが、自然鋭利症候群の正体は氣象庁の上の存在である。」

「何だと！」

国家が裏の手を持っていることを深澤はこれまでの欠片では知ることもなかった。

人間界では……

深澤が四人の血まみれになった姿を見てこう思っていた。

「くそ、自然鋭利症候群の正体を突き止めてこの惨劇を起こさせない！」

しかし、この後起こるのは残酷な結末になることを深澤はまだ知らずにいた。

自然の反撃の章 第三話 深澤のミス（後書き）

次回 自然の反撃の章 第四話 光田と吉村が見た国家の陰謀。
お楽しみ

自然の反撃の章 第四話 光田と吉村が見た国家の陰謀（前書き）

自然と人間の争いにアクシデントが発生する。

自然の反撃の章 第四話 光田と吉村が見た国家の陰謀

光田と吉村は、小此木からある場所に行こうかと誘われていた。

「どうやらレストランだが、そこにいたのは・・・」

「紹介するよ。此の方々は、台風を操ったことがある人たちの二人である。光田と吉村だ。」

「お会いして光栄です。私は、農林水産省の一人である南導雅圭と申します。」

吉村は、嫌な予感がしてならないと思っていた。

地下駐車場まで案内された小此木は、南導を見て狂気を感じた。

「ご苦労小此木・・・」

銃弾を頭に受けた小此木は、闇に落ちて行った。

吉村と光田は、必死に逃げようとしていた。

「逃がしはしない。台風を操って、田舎の糞老人どもに一泡吹かすためにお前等と呼んだのに。なぜ太平洋側に台風をずらす？」

「被害を出さないためにと麻素深に言われたんだ。」

「あの麻素深がね。そいつも俺の邪魔をしたのかお前等の次に殺そうかな？」

光田は、落ちていた金属棒を投げて銃を払った。

「ちっ、逃げやがって！」

銃を拾った南導は、近くにある自転車で彼等を追いかけた。

吉村と光田は、建物の屋上まで上がってうまく隠れていた。

しかし、彼は吉村と光田を探していた。

「まずい、見つかる・・・仕方ない命を失うが此処から飛び降りよう。」

光田と吉村は、一緒に屋上から飛び降りた。

それに気がついた南導は、光田と吉村を見てこう言った。

「馬鹿な奴らだ。命を落としてまで俺から逃れようとは。銃弾が1個しかないがこれで麻素深を射殺できる。」

深澤と松浦は、急いで氣象庁に戻ろうと考えた。

此の時、南導がたいふうのなく頃にの最大の黒幕であることを台風の狂気に聞かされたのである。

「まずいぞ。このままでは麻素深さんが殺される。」

南導は、大山を射殺してしまった。

「ちっ、これでも凶器になる。」

自然の反撃の章 第四話 光田と吉村が見た国家の陰謀（後書き）

次回 自然の反撃の章 第五話 先の見えない・・・

自然の反撃の章 第五話 先の見えない・・・（前書き）

この物語の最大の黒幕の動機が発覚する。

自然の反撃の章 第五話 先の見えない・・・

南導は、麻素深のところへ向かった。

「南導その銃は・・・」

「お前を殴り殺すためにあるんだよ！」

麻素深の頭を銃で粉々にするぐらい殴り殺した南導は、血文字を書いた。

深澤と松浦と高田と和田原と西堀と石川と伊達は、氣象庁にたどり着いた。

「大山が死んでしまっている。」

「きつと自然鋭利症候群に感染して死んだんだ。」

自然幻想世界

「台風の狂気、本当のことを言ってくれ。」

「本当のことを言うとかえっておかしくなる。ある村やある島のよ
うな惨劇なんてもろ過ぎているんだよ。あーあ、奇跡の魔女も絶対
の魔女ですらも、此のカケラにたどりついたことを後悔した方がい
いと思つたのに。自然の真実、自然鋭利症候群の発症者は、自然の
悪霊に取り付かれた感じになり、人間を殺さないと気が済まなくな
るそれを自然の生贄にしてささげそしてね自分の頭を刃物などで抉
って死ぬ。」

「だけど、もし南導と言う人物は、感染者ならほっとくわけにはいかないだろう。」

「吾は、奇跡の魔女に対して疑問を持っている。十一代目にゲームマスターとしてベルンカステルと対決してもらう。」

「よし、ベルンカステル。」

「良いわ。私の残酷なる一撃でも与えてやるわ。」

「自然の最強真実、自然鋭利症候群は存在はしない。」

「くつ、しょっぱながらもその一撃。」

「自然の真実、南導という人物は、数字に置き換えると三七三四になり、その下2桁の数字が34になる。つまりそれはラムダデルタの駒という説だ。」

「なら、赤き真実、南導と私の関係はないみなす。」

「おもしろくもないな。」

台風の狂気は、そう言った。

「自然の黄金真実、南導とベルンカステルの駒、古宮瑠璃華は結託を結びこのゲームの破たんをもくろんだ。」

ベルンカステルは、降伏し負けを認めてしまった。

あとは、ラムダデルタを敗北させることである。

一方・・・・・・・・

「3734ってどういうことなんだろう？」

深澤と伊達は、今まで気がつかないことに気付いた。

「現崎の奴が、いないぞ。」

現崎は、南導の車に隠れていた。

「3734の意味が分かった。」

現崎は、喜んでいた。

自然の反撃の章 第五話 先の見えない・・・（後書き）

次回 第六話 真相が暴かれた。お楽しみに。もう皆さんはたいふうのなく頃にがひぐらしとつみねこにつながりがあるということを知っていますね。

自然の反撃の章

第六話

真相が暴かれた（前書き）

現崎が遂に3734を解き、そして死を覚悟した戦いが始まる。

自然の反撃の章 第六話 真相が暴かれた

現崎は、南導を密かに監視していた。

現崎の携帯電話が鳴った。

「おいっ、馬鹿野郎。こんなときにかかってくるな！もしもし、深澤か。」

「現崎、南導の近くにいるならその場を去れ！直ちに。」

「3734の真相がわかった。」

深澤は、左手で頭を掻いた。

「3734って、南導の事なんだろう。」

「それだけでなく、車のナンバープレートに山狗のメンバーの印が付いていた。印に名前が3734って書いてあるんだ。ちなみにナンバープレートは、34-05だけだね。」

「分かった。現崎戻ってこいよ！」

「分かったよ。全く、深澤のせいではれそうになっているというのに。」

南導は、現崎を見つけてしまった。

「やべっ、見つかった。」

しかし、南導は、気にせず車に乗り込んだ。

現崎は、車のドアを開けて急いで逃げた。

「現崎がいつの間に、まっいいか。」

南導は、現崎が転んだときに出た音に反応した。

「殺す、グフフフフ。」

南導の目は、狂気の目になっていた。

車を現崎のいる方向へと向かわした。

「くそ、こんな時に擦り傷かよ！」

現崎は、慌てて逃げた。右足の擦り傷を気にしながらも。

それは、南導が追いかけてくるからであるしかも車で。

「殺してやるよ。俺の苦しみは、お前等の倍以上だー！」

鈍い音ともに、惨劇が起きてしまった。

現崎の体から赤黒い液体が地面にくつきりとこぼれていた。

「ヒハハハハハ。殺してやった。これが俺の祭囃しだ。さて、次々と殺しに行くか。」

南導は、首を掻いていた。

自然幻想世界

深澤は、台風の狂気に聞いたことを知った。

「ラムダデルタ、お前は絶対を司るが此の世界に絶対は途切れてしまったようだな。」

「ベルンのせいよ。私は、此の世界を絶対に永遠のループにしようとしたのに。」

「ラムダデルタ郷、吾が代わりにベルンのはらわたを抉ってやる。」

「台風の狂気、おまえ。」

「へえー、私が一度したことをするの。正気、ベルンは今は、奇跡の強さが貴方の持つ奇跡より強いだよ。」

「関係ない。吾の世界を買って紡いだ罰だ!」

「もうばれていたのね。」

「自然の真実、南導は、戦闘神経症以外の奇病を抱えている。」

ラムダデルタと深澤は、目が点になった。

「深澤、お前は此の世界を紡ぐ。それは、吾にとって最後の希望になる。」

台風の狂気の中から涙が零れ落ちていた。

「泣くなよ、台風の狂気。俺が紡いでやる。たいふうのなく頃にで最高の最後を。台風の狂気、お前を認める。自然と奇跡の魔術師として、勝手に紡いだベルンカステルに制裁を与えてやれ。」

「ああ、今までありがとう。吾のゲームに参戦してくれて。」

寒冷低気圧は、台風の狂気にゲームマスターの離脱を決定した。

そして新しい台風の狂気、深澤がゲームマスターになった。

「さようなら、深澤。ゲームマスター就任おめでとう。」

「台風の狂気、お前みたいにゲームを紡げるかは心配だが、これで終わるんだな。ゲームクリアのストーリーを作ってお前に語ってやるよ。」

深澤の目からも涙が零れ落ちた。

「台風の狂気、君は、二代目ベルンカステルになる準備をした方がよろしいと思いますよ。」

「寒冷低気圧、自然の大鎌の用意を。」

「かしこまりました。」

人間界

深澤達は、逃げていた。

南導が次々と人々を殺していた。

深澤だけになった。

「南導、来るな！」

「深澤識彦、お前を殺す。」

南導は、鉈で深澤の頭を叩き斬った。

ゲーム結果、バッドエンド。

深澤は、台風の狂気の過去のお話を聞きながら、新たなゲームを紡いでいた。

自然の反撃の章 第六話 真相が暴かれた（後書き）

次回 自然の奇跡の章 第一話 九代目。お楽しみに！自然の奇跡の章でたいふうのなく頃に罪は終わります。

自然の奇跡の章 第一話 九代目（前書き）

物語は、紀元前から始まる。そしてたいふうのなく頃に罪は、自然が罪を犯して終わる。

自然の奇跡の章 第一話 九代目

「深澤、吾が10代目襲名したのは、理由がある。」

「どういつことだ。」

「9代目台風の狂気だ。彼女は、衰退しているローマ帝国を襲ったが、帰りうちに会い、我々の幻想世界で戦死した。」

「自然の真実で、話したのか。今。」

「深澤に納得してもらいたいからな。」

紀元前1148年

8代目台風の狂気は、定年を迎え、台風の狂気引退となっていた。

「君に、9代目台風の狂気を受け継いでもらう。覚悟ができていれば、自然の真実で語り給え。」

「もちろんできます。」

九代目台風の狂気は、台風の狂気では3人目の女性である。

彼女が西暦989年にローマ帝国を攻めに行ったのが仇となった。

「くつ、自然の真実、ローマ帝国は、台風の神罰により滅びる運命をたどる。」

マルズリークは、狂気の笑い声を出した後、紫の発言をした。

「ローマ帝国は、台風の新罰で滅ぶ運命をたどらない。」

九代目台風の狂気は、攻め入ったが失敗に終わり、左胸に大きな傷と左腕と左目が無い姿で帰ってきた。

「ごめん・・・なさい。」

九代目台風の狂気は、闇に落ちて行った。

十代目台風の狂気は、泣きながら九代目を抱きしめた。

「吾が十代目になって、人間に復讐してやる。台風の新罰でな！」

九代目の死後、台風の狂気は、十代目が引き継いだ。

西暦989年、十代目台風の狂気就任。

深澤は、納得していた。

「なるほど、その苦しみが十代目台風の狂気にあつたのか。」

しかし、ここから先は、台風の狂気の策略ではなかった。

西暦1943年、第二次世界大戦中に起きた大いなる奇跡。

台風がアメリカの戦闘機を全滅させたのである。

しかし、台風は日本に上陸してしまった。

「此の奇跡は、吾が行ったものである。」

自然の真実で語った台風の狂気は、絶対的な奇跡より、自然の生んだ奇跡が強いと言った。

西暦1982年、台風の狂気、山狗の一人に警告を促す。

南導は、突然現れた台風の狂気を見て驚いていた。

「何だ、貴様。」

「吾は、台風の狂気、南導、お前はあの村に行くな！」

「もしかして、あの村に何かがある。と言いたいが断る。あのお方の命令で動くことになっている。」

深澤は、台風の狂気の家具達に話しかけた。

「なあ、暖気流。君は此の時何を思ったんだ。」

「残念ながら、此の時、自分は別の人物の家具として雇われていました。」

「寒気団は、どうなっていた？」

「自分は、台風の狂気様と会話を交わすこともないので分かりません。」

メソ擾乱は、深澤も知っていた。

「君は、最近、入ってきたから分らない筈。」

「確か、台風の狂気が南導に何かを言っていたことがありました。」

深澤は、寒冷低気圧にも聞いた。

「はい、台風の狂気は、確かに南導に警告をしておりました。」

「寒冷低気圧、すまないが、あの村とかあのお方とは？赤でいいから語ってくれ。」

「承知しました。あの村と言うのは雛見沢村。あのお方と言うのは、鷹野三四と言うことになります。」

「そういうことが。」

深澤は、何か答えが出たようだ。

「つまり、南導は次の年である1983年で、雛見沢に入ったが何らかの原因で戦闘神経症を患った。」

台風の狂気は、答えに正解した深澤を見て喜んだ。

「その通りだ。深澤。お前は、時期に十一代目台風の狂気になるのにふさわしいかもしれん。」

「台風の狂気、俺も色々考えて出た答えだ。」

前のお話でメタ世界となって隠れいたところを見ていた人物がいた。

「なるほどね、人の子たちは、こんなところで戸惑っていたの？これじゃ台風の神罰は無かったことになるね。」

「やめろ、南導。死刑になるんだぞ。」

「俺には、関係がない。お前等とはにかく死ね。」

高田は、逃げようとしたが、南導はロープで高田の首を絞めた。

「死ね、俺は此の世界が嫌いだ！平和なんか糞喰らえ！」

その次に西堀を殺そうとしていた。しかし、和田原と石川に捕まった。

「離せ愚図が！殺すぞ！」

「殺せばいい、お前が真の黒幕だっていうことにみんな気が付いているんだよ！」

「下らん。ならば。」

三本のナイフが、西堀と和田原と石川の胸に刺さった。

伊達は、松浦と一緒に逃げていた。

途中で深澤と合流して必死になり走って逃げた。

南導は、近くにある鉈を拾った。

深澤達は、隠れた。

「何だよ、このままでは惨劇は俺達まで襲っちゃう。」

松浦は、警戒しながら深澤達を探した。

「どうしようこのままでは殺される。」

松浦の左肩から血が噴き出した。

南導が後ろにいたことに気がつかなかったのである。

深澤と伊達は、二手に分かれた。

伊達は、必死逃げることに夢中になったせいか、海に落ちてしまった。

深澤は、南導が襲ってくることは、分かっていた。

「南導、来るな！」

「深澤識彦、お前を殺す。」

南導は、鉈で深澤の頭をたたき割った。

ゲーム結果、バッドエンド。

「満足しましたか、フェザリーヌ。」

自然の奇跡の章 第二話 九代目（後書き）

次回 自然の奇跡の章 第二話 台風の神罰の消滅。お楽しみに

自然の奇跡の章 第二話 台風の神罰の消滅（前書き）

台風の神罰が消滅した今、新たな世界が紡がれる。

自然の奇跡の章 第二話 台風の神罰の消滅

キリール・コンドリーズがフェザリーヌに言った。

「そうね、悪くないカケラね。でも台風の新罰は消滅するわ。神の権限で赤で言うわ。台風の新罰は、一度も起きていない。そのような儀式は最初から存在しない。」

「そういうことになる」と台風の新罰の存在が認められなくなります。」

ダーク・シャドーゼがそう言った。

「私なら、自然の真実で述べられます。台風の新罰という儀式が起きていない。儀式から最初かに存在しないというよりか存在するが行われなかった。」

フェザリーヌは、今回も何もしなくても奇跡が起きると考えているため、観劇をすることにした。

現世

1989年6月24日、台風10号発生。

10代目台風の狂気は、この時を運命の千年と評した。

深澤たちは、招集された。

麻素深は、台風の動きが変だと気が付いていた。

「気象操作は、しないことを宣言する。」

「ということは、監視していればいいことだな。」

現崎は、楽しそうな表情を浮かべていた。

6月25日、台風10号。最大風速25m。中心気圧985hPa。
場所沖ノ鳥島南200?。移動方向北北東。移動スピード20?/
h。

自然の奇跡の章 第二話 台風の神罰の消滅（後書き）

次回 自然の奇跡の章 第三話 台風10号、散る。お楽しみに。

自然の奇跡の章 第三話 台風10号、散る（前書き）

台風10号が消えた後、1990年の物語に突入する。

自然の奇跡の章 第三話 台風10号、散る

6月26日台風10号最大風速30m。中心気圧970hPa。場所小笠原諸島付近。移動方向 北。移動スピード 25?。場

日本に接近中の台風10号は、気象庁でもとらえていた。

現崎と深澤は、台風10号接近に伴い、注意深く確認をしていた。

松浦は、外で南導を見ていた。

南導と武紗里俊智たけさりしゅんとちは、何かを語り合っていた。

伊達は、台風のことので心配しながらもこんなことを言い始めた。

「台風が、このまま発達しながら来て、日本に上陸して大被害が出たらどうしよう? なつ深澤。」

「お前、目が輝いているぞ!」

「なつ・・・どんな被害になるのかな? 痛っ!」

玩具のハンマーで、叩かれた伊達。

「不謹慎なことを言うからそうなるのよ。」

松浦が、ツンツンしながら言った。

6月26日台風10号。最大風速30m。中心気圧975hPa。

場所伊豆諸島付近。移動方向、北。移動スピード20?。次第に衰えている模様。

この日は、気象庁に招集されたメンバーはいなかった。

深澤と現崎と大山は、難破して、悪食島（六軒島）に流れ着いた二人を保護したというニュースを聞いていた。

「さつそく、事故のニュースか。台風10号が気になるな。」

「でも、衰退しているらしいよ。このままいけば上陸前に熱帯低気圧になっているよ。」

「確かに、この状態なら自然の奇跡だ。」

大山は、現崎の行ったことに納得していたが、「この状態なら自然の奇跡だ。」とは、一体どういうことなのだろうか？

6月27日台風10号。最大風速23m。中心気圧985hPa。場所横須賀市南200?。移動方向 北北西。移動スピード 30?。

高田と吉村は、中華料理を食べていた。

「台風10号、そろそろ消えるかもな?」

「力の使いすぎだよ。見事に動き方も変だったからな。」

石川と和田原は、麻素深と話していた。

「本当に、気象操作しなくてもいいんですかね。」

「大丈夫だ。日本の技術はいずれ、世界を震えたたせる物となると俺は誓っているよ。気象操作なんて、惨劇のもとだから。」

6月28日台風10号は熱帯低気圧に変わった。

メタ世界

「十代目に問う。」

「どうした、深澤。いや、十一代目の候補者。」

「これまでの世界では、台風10号は、東京に上陸して大被害を出していたが、この世界はなんだ？」

「お前が、紡いだ世界だが、お前も分からぬのか。」

「何を紡いだらこうなるのだろうか？」

「自然の真実、台風10号は、これまでの世界では上陸をしていない。」

「ということは、前線が原因。」

「そういうことだ。」

「南導が犯人になることになるという説は？」

「自然の真実、南導が一人で犯行を行うことができない。共犯者が

存在する。その共犯者は、武紗里と麻素深である。」

現世

1990年の夏。

深澤たちは、解放された気分を存分に味わっていた。

しかし、南導と武紗里と麻素深は、何かを企んでいた。

自然の奇跡の章 第三話 台風10号、散る（後書き）

次回 自然の奇跡の章 第四話 武紗里、深澤に真相を話す。お
楽しみに！

自然の奇跡の章 第四話 武紗里、深澤に真相を話す（前書き）

1990年の出来事が1997年に響く。

自然の奇跡の章 第四話 武紗里、深澤に真相を話す

1990年の夏。

南導と武紗里と麻素深は、何やら奇妙なことを企んでいた。

「それは、面白そうだな。」

「ただし、そんなことをして奴らは、喜ぶのか？」

「架空だが、それでいい。彼らが死ねば俺がインタビューで台風の神罰で死亡した。と告げてやるよ。」

「それなら、考えてもいい感じになるな。」

此の三人に、矛盾するような点があった。

それを武紗里は、知っていた。

武紗里は、アパートに戻り、一缶のビールを飲んでいた。

「やつぱり、深澤に此の事を話したほうがいいかもな。」

翌朝になり、深澤の歩いているところに、武紗里がやってきた。

「君、誰だ？」

「武紗里俊智と申します。」

「武紗里さん、俺に何の用だ？」

「気象操作の件ですが・・・」

しばらくして、深澤は驚いた。

「俺たち殺される。南導という人物にか。」

「そうだ。だけど、此の事を話した俺が殺されるかもしれない。」

メタ世界

「今までとは、違う。台風の狂気リザインしたらどうだ。」

「ふんっ、だが、この状態ではもう、やむを得ない。」

現世

1997年の春になり、武紗里が恐れていたことが現実になってしまっ

「南導、俺は、裏切りを行っていない。」

「嘘をつくのなら、もっとまじな嘘をつけ！」

南導は、銃を発砲した。

武紗里は、闇の中へと誘われてしまった。

事態は、次第に悪くなりかけていた。

自然の奇跡の章 第四話 武紗里、深澤に真相を話す（後書き）

次回 第五話 2004年最後の意味。お楽しみに。たいふう
はある意味、リドル・ストーリーです。

自然の奇跡の章 第五話 2004年最後の意味（前書き）

たいふうの最後が近づいてきました。

自然の奇跡の章 第五話 2004年最後の意味

2004年の春。

深澤は、少し暗い表情をしていた。

前木は、深澤の表情を見て心配していた。

「どうしたの？そんな顔をして。」

「無理だよ。この世界紡ぐのはやっぱり無理だったんだ。」

メタ世界

「俺は、どうしてこの場に誘われたんだ。」

台風の狂気は、右手で深澤の顔を叩いた。

「どうしたんだよ深澤！突然元気を失うとは、それでもお前は男か！」

「俺が紡いだ世界で、一人を失った。これでは全員を救うことはできない。」

「吾は、悪魔だがアドバイスぐらいしてやれる。自然の真実、この世界には一人を失ったら、もう一人の命を奪えという掟がある。」

「それじゃ、更に一人を殺せと言うのかよ。」

「心配するな、麻素深は、2005年に死亡する。」

「本当なのか？」

「吾が嘘をついたら、ゲームマスターとしての立場が危うい。しかも、御前に受け継ぐのは、台風の狂気だけではない。ゲームマスターの権限も受け継ぐ。吾には、時間がない。」

深澤は、元気を取り戻した。

「台風の狂気のおかげで、気分が治ったぜ！あと俺をぶっつけてくれてありがとう。」

「ならば、これより、新しい台風の狂気誕生を祝うぞ。」

自然界の者たちが、深澤を拍手して熱く歓迎をしていた。

「今宵、新しき台風の狂気とゲームマスターが誕生した。」

自然の奇跡の章 第五話 2004年最後の意味（後書き）

次回 自然の奇跡の章 第六話 深澤VS南導最後の戦い。お楽しみに

自然の奇跡の章 第六話 深澤VS南導最後の戦い（前書き）

ついに終結を迎え始める。

自然の奇跡の章 第六話 深澤VS南導最後の戦い

2004年の夏、深澤と南導は出会った。

「南導、とうとう出会えたな。」

「深澤、俺のたくらみをすでに知っていたのか。」

「あいつからたつぷりと聞かせてもらったからな。武紗里にな。」

「あの野郎か。殺して正解だ。しかし、御前等も殺さなければならなくなかった。」

「なぜ、俺達を殺すことに意味がある。」

「それは、俺の気分を落ち着けたいからだ。ある病気のせいですでに多くの人の命を奪っている。だからこそ終止符を打ちたい。」

「醜き欲望に刈り取られたな南導。」

「醜き欲望、俺は決して醜き欲望に取りつかれていない。」

「お前の病気が、7つの大罪のうちの2つを行っている。地に落ちたな。」

深澤は、自然の魔法で南導を蹴り上げた。

「くっ、本気で殺ることにする。」

ナイフを手にも持った南導は、深澤に襲いかかった。

左頬から滴る血を触った深澤は少しだけ自然の魔法に力を頼らずに行動をとった。

「もう、お前の好きにはさせねえ。南導、覚悟しろ！」

深澤の右腕から光の刀が現れた。

「お前だけに、この世界の最後の自然の真実を言ってやる。台風は操れば崇られる。」

自然の剣が南導の心臓をぶちぬいた。

南導の目が白目を向いて倒れた。

深澤は、南導を自然の海に捨てた。

「お前の魂は、地獄にて償うことになるだろう。」

台風の狂気は、ベルンカステルに出会っていた。

「吾は、不正行為を嫌うんでね。」

「私は、この世界も祝福する気なんてないわよ。」

「だが、こうして奇跡が起きた。最後の試練を超えれば物語の欠片は幕を閉じる。」

台風の狂気は、自然の奇跡の力をベルンカステルに浴びせた。

「くっ、重過ぎる・・・」

「自然の奇跡は、意図的な奇跡よりも10000倍の価値がある。」

自然の奇跡をどかした台風の狂気は、黒ネコに囲まれていることに気がついた。

「黒ネコたちよ。自然の奇跡なんか食いちぎりなさい。」

台風の狂気に黒ネコたちが襲いかかる。

「自然の大鎌、吾の手に来なさい。」

自然の大鎌を手にした台風の狂気は黒ネコ達を払いのけた。

「っ！なによ。私の可愛い黒ネコたちを。」

「悪いが、お前も黒ネコのように切り刻まれたいのか？自然の大鎌に勝てる者などおらん！」

ベルンカステルも鎌を取り出した。

「いいわ、自然の大鎌と私の大鎌。どっちが強い競争よ。」

「良いだろう。負けた者は、腸を抉り出すということだ。」

自然の奇跡の章 第六話 深澤VS南導最後の戦い（後書き）

次回 自然の奇跡の章 第七話 終演の力ケラ。お楽しみに！

第八話目でたいふう罪は、終焉を迎えます。たいふう礼ではなく、たいふう嵐という続編がありますが、番外編なので楽しみにしてください。

自然の奇跡の章 第七話 終演のカケラ

台風の狂気は、自然の大鎌を振り翳してこう言った。

「吾は、2代目ベルンカステルとなり、傍観者となる。」

「あなたは、2代目になる資格はないわ。」

「吾にとって、自然界はいいところだ。しかし、自然界は、二つに分かれている。」

「はー、それってどういうこと？」

「自幻界を知っているか？」

「何のこと？」

「魔女たちにあらされてはいけない神秘の場所。いろんな獣達が平和に暮らしている。最初は自然界と一体となっていたが・・・」

「良いわ。その場所もらう。あなたを倒してね。」

「自然の使徒を甘く見るな奇跡の魔女！」

台風の狂気とベルンカステルはそれぞれの大鎌で攻撃を開始した。

台風の狂気の左頬が切れて血が滴り落ちた。

ベルンカステルの右肩の服の部分が曝け出された。

「くっ・・・」

「これで終わりだな。ベルンカステル。」

台風の狂気は、右腕から剣を取り出した。

その剣は、瞬時にベルンカステルの両足を切断した。

「まさか、私が負ける・・・」

「カケラは、吾の紡ぐ通りにしていくことで成熟した。貴様等のせいでほとんど失敗作だ。死して償ってもらうぞ！」

台風の狂気は、自然の大鎌を器用に投げた。

そして、倒れているベルンカステルの頭に突き刺さった。

「これで、物語は終焉となった。後は麻素深が最後の一言を言えば終わる。」

台風の狂気は、右腕の剣でベルンカステルの腹を裂いた。

返り血を浴びた台風の狂気は、深澤に後を託すことにした。

自然の奇跡の章 第七話 終演のカケラ（後書き）

次回 自然の奇跡の章 最終話 最後の一言。お楽しみに！

最終回がすぐそばにきました。たいふう罪！嵐は、8月ごろ連載予定です。Typhoon Friendsの世界観と自然界がつながりを持っています。

自然の奇跡の章 最終話 最後の一言

2004年秋、台風が10個目の上陸をした後であった。

アメリカのある研究団体が、深澤達の所にやってきた。

「台風を操作したなんてそんなことしていません。」

「いいえ、麻素深さんがそう言ったのです。」

「我々は、していないという事実でしかなしえない。」

アメリカ人の研究団体チームは、これ以上しつこく迫っていてもきりがないので帰って行った。

深澤は疑問に思いつつ、仲間達に会いに行った。

松浦達は、衝撃的な発言をする。

「麻素深さん、脳卒中の初期段階なんだって。」

「本人は、治すはあるのかよ。」

「実はないのよ。本人は自然にあんな罪をおかしたということだから償いとして病気に倒れて命を落とすことにしたと言ったのよ!」

伊達は毒舌の聞いた口調で言った。

「あのジジイは、出会ってからイカれていたが、死ぬ時もイカれて

いるよ。」

現崎は、麻素深が死ぬことになると思いであつた。

「麻素深さんが死んだら、僕達はそれを受け継ぐ自然のままにあれを言うためにね。」

そして2005年の春、麻素深が脳卒中にて帰らぬ人となつた。

麻素深の悲しみは、深澤達に伝わって行つた。

一つの手紙が死亡通告とともに届いた。

深澤は、その手紙を読んだ。

「脳卒中で死ぬ前に、君達に言わなければならないことがある。自然を操れば自然の天罰を下り惨劇が起きる。だから自然を操ってはならない。君達の行動が正しいことだと私は悔やんだ。私が死ぬ時、この手紙が同時に届くであろう。最後の一言を述べて極楽浄土に逝く私を見守ってほしい。人間は自然を操ることはレジスタンスと同じ行為、すなわち悪いことである。そして行つた後に悲劇を重ねてしまう。自然の怖さを知つたからこそ紡がれる奇跡と絆がある。それだけを信じてお前達は未来をさらに紡いで行け。涙の滲むことがあつたからこそ台風は消えた。台風も生き物だ。台風も心底鳴いていたのか見れない獣のように。たいふうのなく頃に我々は自然の奇跡を多数目撃するであろう。」

この手紙を見た前木は、涙を流していた。

「本当に、あ、ありがとうございました麻素深さん！」

現崎は、涙を拭いて決心した。

「俺も、麻素深さんみたいな人になって自然を操るといふ愚かな行動をするなど未来の人々に伝えるよ。」

西堀達も一人一人の決断で自然を守ることを誓った。

この物語は悲しいことはない。奇跡がすべてを紡ぐ手立てになり自然の脅威を操れば脅威は狂気になるのである。

自然界では、罪流しを始めた後、台風の狂気が2代目ベルンカステルに就任した。

11代目台風の狂気は、涙を浮かべながらおめでとくと叫ぶような拍手をした。

「俺が紡いだ欠片は、どうだった？」

「感動できた。怖じ気つくことなくここまで来たことに感謝するぞ。深澤！」

深澤は、2代目ベルンカステル抱きしめてこう言った。

「お前は、俺達に自然の脅威を再確認させてくれた。だからその恩返しにこの物語をお前に託す。」

2代目ベルンカステルは、深澤に涙を浮かべながら言った。

「世界は終結した。ここより、平和になる。幸福終了として、お前

ハッピーエンド

を前木というものと結婚するがよい。幾多の運命に抗い続けた戦いも終わる。この世界に最後の欠片を用意した。それを紡ぎ終われば吾等は戦いを全うする。」

「ああ、そうだな。」

完結

自然の奇跡の章 最終話 最後の一言（後書き）

今まで、たいふうのなく頃にを見ていただきありがとうございました。8月は番外編がありますので楽しみにしてください。最後に深澤からの一言で締めます。

「俺達は、自然が味方していることを絶対に忘れてはならない。それを裏切ると惨劇が起きる。だから、自然と仲良しになろう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3235m/>

自然がお怒りになる頃にシリーズ第一弾、たいふうのなく頃に罪

2011年10月9日22時53分発行